

## 教材としての西鶴作品

### — 変遷とその意味 —

#### 一、はじめに

西鶴作品の教科書掲載の歴史は決して浅くはない。明治の末年から旧制中学校用の教科書に取られ、大正・昭和戦前期とその種類と数は増え続ける。戦時下においても採用は続き、戦後の中学校・高校へと引き継がれて行く。このように、さまざまな社会や教育観の変化を通り抜けて長く教科書に入り続けている一方で、過去においても、そして現在においても、授業で積極的に取り扱われたという例を耳にする機会は乏しい。なぜそのようなことになるのか。それはもちろん西鶴の作品がある種の扱いにくさを持っているということとを意味するのであるが、逆にそれを扱えない、西鶴作品を採用しておきながら扱いきれないというところに、国語教育あるいは古典教育の抱えている問題を見出すことができるようにも思える。

本稿は、このような西鶴作品の教材としての足取りをたどることで、近代の国語教育・古典教育のひとつの側面を明らかにすることを目的としたものである。

#### 二、明治・大正期の教材としての西鶴作品

管見の限りでは、明治の四四年の『国文読本』の巻一〇に入ったものが教材としての西鶴作品の最初で、国語漢文研究会の編集で自治館という出版社から出されている。作品は『日本永代蔵』のなかの「世界の借家大将」である。明治期においては、他の例を見出し

得なかった。

その後、大正時代にはいると、以下の掲載が確認できる。

国語教室 有働 裕

『中等国文教科書』吉田彌平編 光風館

大正三年版(修正九版)巻八に「智慧の振賣」(『西鶴織留』「何にても智慧の振賣」)が掲載され、大正四、六、七年版でも確認出来る。大正一二年版(修正一五版)ではこれに代わって巻七に「借家大将」(「世界の借家大将」)が入る。以後掲載は昭和に入っても続く(次章参照)。

『中学校用国語教科書』金沢庄三郎編 弘道館

大正六年版(修正四版)巻八に「雪の朝飯」(『武家義理物語』「約束は雪の朝飯」)が掲載。『旧制中等学校国語教科書内容索引』(田坂文穂 教科書研究センター・昭和五八年)によれば初版(大正三年)からであり、また、巻四にも「媒拂い」が掲載されている(大正三、六年)とする。

『中等教育国語読本』新村出編 開成館

『旧制中等学校国語教科書内容索引』によれば、大正六年版巻八に「当流のものすき」掲載。

『国文新選』垣内松三・野村八良・斎藤清衛・平林治徳・鈴木敏也編 明治書院

大正一三年版(初版)巻一〇に「蚤の籠抜け」(『西鶴諸国はなし』)が掲載。

『現代国語読本』八波則吉編 東京開成館

大正一五年版（修正三版）巻一〇に「千貫目」（『日本永代蔵』「世界の借家大将」）が掲載。昭和一〇年版（修正七版）にもほとんど同じ形で掲載。

ところで、このように西鶴が取り上げられるようになった背景としては、文壇を中心とした西鶴ブームとでも言うべき西鶴熱の高まりが考えられる。幸田露伴・田山花袋らの作家が西鶴賛美の文章を書いたことは改めて言うまでもないことであるが、それが中学校用の教科書や指導書に取り上げられるようになっていく。また、大正期の文学教育隆盛の影響か、文学史的な観点を重視した編集の教科書が中学校用では目立ち、そのような立場からも西鶴作品は取り上げられたものと思われる。

しかし、それにしても、明治四十四年の採用というのは時期として早く、編集者としてもかなりの決断であったと思われる。というのも、当時の文学史の教科書には、

西鶴の作では、一代男、一代女、五人女などは傑作であるが、何れも現今発売禁止の書と聞かば、其内容も想像されよう。世帯風俗を観察する着眼が如何にも非凡で、写し方の逼真軽妙なことは、容易に企及し難いが、別段趣向もない零碎の巷談小説である。（高野辰之『国文学史教科書』明治三十七年訂正四版）

といった記述があり、中学や師範学校の教育現場においてはこのような認識が一般的なものであったと思われるからである。いや、中学校どころか、かの東京帝国大学でさえも似たり寄ったりであったことは、次に引用した永積安明氏の「藤村先生をおもう」（『国語と国文学』昭和二年二月）という文章からもうかがえる。東京大学で近世文学を担当し、国語教育学会の会長をも勤めた藤村作への追悼文である。

藤村先生の還暦をお祝いした会の席上で、三上博士が、藤村君がはじめて文学部の講座をうけて、東大の文学部で講義をされるとき（明治四十年代、有働注）、近世の町人文学を論題にされた。西鶴の好色ものなどを、大学で下手に講義されては困るとおもって、自分は文学部長として、部課の某々に、こっそりうるから聞いてくるように命じたが、さすがは藤村君であって、大学の講義としての品位を傷つけることなく、立派に講義されたので安心した。というような話があった。

この話を聞いたとき、ぼくはまったくおどろいてしまったのだけれども、藤村先生が「東京帝国大学」という官学のなかに、はじめて近世町人の文学を学問として持ちこまれたということは、なかなか大へんなことであつたし、今から見れば笑い話のようなこの事件も、画期的なことがらであつたといわなければならない。つまり近世町人の文学を、官学のなかに勇敢に持ちこむということは、ある点では、古事記・万葉からはじまって、源氏物語や八代集などを中心として研究した和学の伝統が、うちやぶられることであつたからである。

大学においてでさえこのような状況であつては、この後間もなく中学校の教員が西鶴を偏見抜きで理解し教えるようになったとは到底考えられない。

### 三、昭和戦前・戦中期の教材としての西鶴作品

軍国主義が台頭するこの時期、それとは到底相入れないと思われる西鶴作品は減少して行くのでは、という予想を当初は持っていたが、それは大きく裏切られる調査結果となった。まず、国立教育

研究所附属図書館や東書文庫で、比較的長期間にわたっての出版が確認出来るもの、すなわち、おそらくは人気があったと思われる二つの教科書の掲載状況を示し、そのことを確認したい。

『中学国文教科書』は、前章でも触れたが、まず大正三年に「智恵の振賣」という『西鶴織留』の中の一章を載せ、それは大正二三年に「世界の借家大将」に変わるが、昭和に入っても掲載は続き、昭和九年の修正二二版・巻一〇では「奈良の庭籠」という「世間胸算用」の一章に変わる。昭和一三年には新装の修正版初版が出るがこれについては変化はない。太平洋戦争下の昭和一六年から光風館のような有力な出版社が何社かまとめられて「中等学校教科書株式会社」となり、そこからそれぞれとの教科書を継承したものが準国定教科書のような形で出されるようになったが、昭和一八年になっても全く同じ形で「奈良の庭籠」の掲載は続いている。

また、『新編中学国語読本』（金子元臣編 明治書院）の場合も同じで、初版（昭和七年）の巻八に採用された「世界の借家大将」は、昭和一六年の新制修正版でも同じ巻に載り、昭和一八年の中等学校教科書株式会社の時期のものでも掲載が確認出来る。以下、その他の教科書について確認できたものを記す。

- 『中等国文』三省堂編集部編 三省堂
- 昭和四年版（初版）巻八に「借家大将」掲載。
- 『新制中学国文』新村出・鈴木敏也・沢瀧久孝編 金港堂
- 昭和七年版（初版）巻七に「世界の借家大将」掲載。
- 『新国文読本』吉田彌平編 光風館
- 昭和七年版（初版）巻一〇に「借家大将」掲載。
- 『帝国新国文』藤村作編 帝国書院
- 昭和八年版（初版）巻一〇に「安立町の隠れ家」（『万の文反

古』）掲載。

『改訂中等国文』藤村作・島津久基編 至文堂

昭和九年版（訂正三版）巻九に「世界の借家大将」掲載。

『新国語読本』顕原退蔵編 京都星野書店

昭和九年版（初版）巻一〇に「山崎の長者」（『日本永代蔵』

「世渡りには淀鯉のはたらき」）。昭和一〇、一二、一三年版

（訂正再版、改訂版、改訂版訂正再版）にも同様に掲載。

『改訂中等国文』三矢重松編 文学社

昭和九年版（訂正七版）巻九に「世界の借家大将」。昭和一二

年版（訂正九版）は『新制中等国文』となるが同様に掲載。

『大日本読本』高木武編 富山房

昭和一〇年版（新制二版）巻九に「世界の借家大将」。昭和一

二年版（改訂一版）でも同様に掲載。

『新修国文』富山房編集部編 富山房

昭和一一年版（初版）巻九に「初午は乗ってくる仕合」（『日

本永代蔵』）。

『醇正国語』能勢朝次編 文学社

昭和一二年版（初版）巻一〇に「世界の借家大将」。

『新制国語』広島高等師範附属中国語漢文研究会編 修文館

昭和一三年版（訂正再版）巻十に「銀徳」（『日本永代蔵』

「初午は乗ってくる仕合」）。昭和一五年版の『新制国語 指

導の実際』（指導書）でも確認できる。

『新中学国文』鈴木敏也編 目黒書店

昭和一四年版（初版）巻一〇に「蚤の籠ぬけ」（『西鶴諸国ば

なし』）。

『中学読本』池田亀鑑・岩田九郎編 帝国書院

昭和一五年版（初版）巻九に「大つごもりは合はぬ算用」

〔西鶴諸国はなし〕掲載。

『国文』久松潜一編 弘道館

昭和一五年版（初版）巻九に「大つごもりは合はぬ算用」掲載。

昭和一三年、『小学国語読本』巻一一に「源氏物語」が掲載されたことに對し、橋純一氏は、『国語解釈』に七月号以降、数回にわたって「小学国語読本巻十一」「源氏物語」について文部省の自省を懇請する」等の文章を載せる。「源氏物語」は、紫式部の紹介と、「若紫」「末摘花」の一部の現代語訳とから成る教材で、それに対する批判の根拠は、「源氏物語は全篇一貫して、その性格が淫靡であり不健全である」「だらけ切った雰囲気を感じさせる」といったところにあった。『国語解釈』誌には橋純一氏が賛意を示す多くの反響が寄せられ、当時の世相をうかがい知ることができ、このような時代背景であったことを考慮に入れてみると、西鶴作品の教材化が増え続けていることはいささか不自然にも思える。しかし、多くの教科書においては、『大日本読本』の場合のように昭和一二年版になって各巻に「国民精神篇」が付されるようになって、西鶴作品の掲載には何の変化もない。あの橋純一にしても、

近松の浄瑠璃には、全人間が奉ぜずにはゐられない高貴な人間  
道徳の光明がある。西鶴の浮世草子にも、その向ふ所の方途は  
ともかくとして、澁刺たる精力主義の精神が感ぜられる。源氏  
物語にさういった全人間的なものがあるか。（『国語解釈』昭  
和一三年六月の後記）

と記している。

西鶴作品の採用の理由として考えられるのは、やはり当時の中学校の性格である。義務教育ではなく、全国的に見れば選ばれた少数の優勝な生徒を対象としているため、ある程度学術的で良いという

認識があったものと思われる。教科書に道徳性が求められるということは、小学校に比べてはるかに乏しかったであろう。また文壇では、相変わらず西鶴熱が高かった。武田麟太郎のようにプロレタリア文学から転向して西鶴風の小説を書くことで認められる作家もいた時代である。大正期の文学教育重視の名残もあり、識者の間では、西鶴の文学史上の位置付けは動かぬものであったと思われる。

しかしこれもまた、現場でどれくらい読まれ、認識されていたかというとはなはだ怪しい。中学校の現場での状況については寡聞にして知らないが、神保五彌氏は久留米予備士官学校で幹部候補生であったとき、「反省録」に「余が尊敬する人物」として井原西鶴の名を記して提出したところ、「かかる戦時下に、西鶴ごときを尊敬するとは、候補生は時局を何と心得ているか」と面罵され、「このような不心得な自由主義者は、国賊に値する」と怒られたという（神保五彌「いま思うこと」、小学館『完訳日本の古典』第五三巻月報所収）。また、当時の第一線の学者を集めた日本諸学振興委員会の国語国文学特別学会（昭和一七年五月十五、十六日 奈良女子高等師範学校）での野間光辰氏の発表に對して、西尾実氏は次に引用したような批判を述べている。数多くの中学校用教科書で西鶴作品が教材化されている一方で、国文学研究者の間でも「時局性」が強く求められていたのである。

大東亜新秩序の建設といふ主題からいふと、肇国精神の史的発展として跡づけられるやうな言語事実・文学事実がまづ挙げられ、漸次多くなってきた大東亜各地域との文化的交渉も考へられる筈であるが、発表のすべてにはさういふ意図が浸透してはゐなかった。（中略）野間氏の発表においては、さふいふ片鱗さへ示されなかった。討議の席上、私は氏の研究発表について、氏に都の錦の文学史的意義をどう考へてゐられるかをお尋ねし、

併せて、近世文学研究諸家に、皇国文学の発展における近世文学の意義をどう考へるべきかをお尋ねせざるを得なかった。といふのは、近世文学のある性質に対して、皇国精神の発展といふ立場から、肯定的な見解と否定的な見解とが示されたまゝ、何等の批判も行はずに経過してしまひさふになつたので、この特別学会に首尾あらしめるためにも、また問題そのもののためにも、この学会としての意向を明らかにして置くべきであると考へたからであつた。（数学局編纂『日本諸学』第二号昭和一七年一月）

#### 四、戦後の教材としての西鶴作品

戦後、小中学校での古典の扱いは極端に少なくなり、その中心は高等学校において行われるようになる。新教育制度の中で西鶴は、高等学校においては戦前中学校用教科書の継承のごとく各社で採用れ、高校ばかりではなく一時は義務教育である新制の中学校の教材としても登場している。それらの掲載状況をすべて報告することは多くの紙面を必要とし、また、作品も「世界の借家大将」にまます集中する傾向が強く、新たな選択の基準が見られるわけでもない。そこで、控えることにしたい。本章では、昭和の三〇年ごろまでの扱い方に見られる、西鶴作品教材化の特異な傾向について述べることにする。

例えば、『われわれの国語 三』という教科書には「大晦日はあはぬ算用」が載り、そのあとに、

研究 この文章の中に見える封建的な考え方を指摘してみよう。  
研究 この文章には非合理なところがあはせぬか調べてみよう。

と記されている。『現代国語 文学三』（昭和三〇・実教出版）の「世界の借家大将」の

学習 四、この作品を読んで、どのような社会相を考へることが  
できるか。

というのも同様の発想と考へることができ、中学校用『私たちの国語 三年下』（昭和三一・秀英出版）の「はくろは昔のおもかげ」（『武家義理物語』）にも、

学習のてびき

三 この作品を読んで、封建社会の義理やしきたりについてみんなだ批判してみよう。

四 作者は、こうした封建社会の義理を賛美しているのか、あるいは、こうした義理やしきたりのやかましい社会に生きた人たちの心情を写すことを主眼としているか、作品をよく味わつた上で話しあつてみよう。

といった記述が添えられている。

言うまでもなくこの時期は、経験主義や単元学習が盛んに導入された時期である。戦前の教育観の反省、アメリカの教育理論の導入がその背景であるわけだが、西鶴作品もまさに民主主義を学ぶための討論の材料として生かされようとしたわけである。すなわち、「学習指導要領 国語科編（試案）」（昭和二年）の「第一節 まえがき」に、

中学校の国語教育は、小学校六か年の基礎のうえにたつということから、程度の高いものになりがちであるが、日常生活のことばからはなれないように指導することがたいせつである。

その意味からも中学校の国語教育は、古典の教育から解放されなければならない。また、特殊な趣味養成としての文学教育に終つてもいけない。つねにもっと広い「ことばの生活」に着

眼し、実際の社会生活に役立つ国語の力をつけることを目指けなければならない。

とあることや、「中学校高等学校学習指導要領 国語科編（試案）」（昭和二六年）の「第一章 国語科の目標」に、

国語の学習指導の目標は、直接的には、国語を正しく効果簡に使っていく習慣と態度を養い、技術と能力をみがき、鑑賞力と知識と理解を増し、理想を高めていくことであるが、国語科がこの目標を達成するには、生徒は実際に何かにについて話し、何かにについて書き、何かにについて読むのでなければならない。そこに、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことの題材がでてくるが、それは当然、教育全般の目標に応じて選ばなければならない。この場合、国語科としては、特に、道徳教育・民主教育・国際的理解親善に寄与することを心がけるべきである。

また、「高等学校学習指導要領 国語科編」（昭和三〇年）の「第一章 国語科の目標」の、

1 言語文化を広く深く理解できるように、読解力を豊かにし、特に鑑賞力や批判力を伸張させ、その読書の範囲も、現代文と並んで古文や漢文にまで拡充させる。

しかしながら、この時期においても「古典文学を批判的に読む」という発想の導入は西鶴作品に限られており、「源氏物語」や「徒然草」などに対しては見受けられない。なぜこのような差が生じたのか。「封建時代」Ⅱ江戸時代という図式もあってのことだとは思いますが、そういった読み方を西鶴作品そのものが許容しているとも言いは得るのではないだろうか。

本稿では西鶴作品の文体やその研究史の問題に十分に触れることはできないが、戦後の西鶴研究はまさにそういった読みの可能性と

不可分なところにあったように思う。たとえば、『世間胸算用』巻一の二「長刀はむかしの鞘」には、次のような記述がある。

口より見つくして末一段の大晦日になりて、淨瑠璃小唄の声も出ず、けふ一日の暮せはしく、ことさら小家がちなる所は、喧嘩と洗濯と壁下地つづくと、何もか一度に取りまぜて、春の用意とて、いかな事、餅ひとつ小鯛一疋もなし。世にある人を見くらべて、浅ましく哀れなり。この相借屋六七軒、何として年を取る事ぞと思ひしに、みな質種の心当てあれば、すこしも世をなげく風情なし。（中略）楽しみは貧賤にありと古人の詞反古にならず。

このように、時に統一性を欠き矛盾しながら展開していく傾向が西鶴作品全般に見られるのであるが、これを否定的側面としてではなく、西鶴の手法の問題として最初にとらえたのが、野間光辰氏の「西鶴の方法」『西鶴五つの方法』（昭和五六年『西鶴新々攷』岩波書店）所収）であった。森山重雄氏の「咄の伝統と西鶴」（昭和三五年『封建庶民文学の研究』「三一書房」所収）や中村幸彦氏の「近世的表現」（昭和五七年『中村幸彦著述集』第二巻『中央公論社』所収）もその延長上に位置付けのことが可能であり、浮橋康彦『西鶴作品の反語的性格』（昭和四四年『国文学研究資料集成』西鶴）『有精堂』所収）はまさにこの課題に鋭角的に切り込んだものと言える。

相矛盾した見方を敢えて配し、多面的な見方を含み込むような文体を西鶴作品の特色として認めるとき、たとえば「世界の借家大将」に描かれた藤市という人間像を単純に「当時の上方町人の理想像」といった形で断定してしまうことにも問題がある。あるいは、西鶴作品の代表的教材である「世界の借家大将」は、その「まとまりの良さ」において西鶴らしい文体を十分に備えたとは言いがたい作

品と言いつてもいいかもしれない。ともかく、先に示した『私たちの国語 三年下』の「学習のてびき」における「作者は、こうした封建社会の義理を賛美しているのか、あるいは、こうした義理やしきたりのやかましい社会に生きた人たちの心情を写すことを主眼としているか、作品をよく味わった上で話しあってみよう。」という発想は、結果としては、極めて的を得たものになっていると言えよう。

## 五、結びにかえて

前章で示したような西鶴作品の扱い方が見られたことはこの時期の特色ではあるが、それでも決して多数派であったわけではない。そしてこの後、経験主義に立つ単元学習が学力低下を招くとして批判され、指導要領もその内容を変化させていくこととなり、それに連れてこのような西鶴作品の扱いは姿を消していくこととなる。本稿冒頭でも述べた通り、西鶴作品としての特色を生かすこともないまま、あまり取り上げられない古典教材として教科書の一隅を占めているだけの存在となってしまうわけである。

私は、専門分野の最先端の研究成果を取り入れることがそのまま「よい授業」を生み出すことにつながるといった単純な発想は持たない。もっとも、当然のことながら、教育現場で行われることが専門の研究とは無縁の「子供騙し」であっていいなどとも思わない。渋谷孝氏の言うごとく、「特定の文芸研究理論を研究し、教材分析を行い、それと授業者の日常の学級経営と日常の授業のあり方との関係においてのみ、授業者は、よい意味で変わり得る」のであり、文学教育論は「文芸教材と授業者と学習者との三つの要因」を踏まえて論じられるのであれば不毛であろう（『文学教育論批判』明治図書昭和六三年）。しかしながら、この当然すぎるほどの理屈が

実際に生かされた例は決して多くはないのである。その中にあって、終戦直後に見られた西鶴作品の扱い方に、生徒の現実を踏まえて討論に向かわせようとする試みのあったことは注目値する。

昭和戦前期においては、中学校のみならず小学校においても古典文学は教科書教材の主流であった。そしてそれについてはたいいてい次のような理屈が述べられていた。

要するに国文学も真に日本の学問としての自覚のもとに行われべきである。さうして国文学の研究に従ひ教育に当るものも皇国の大きな使命達成の一翼たることを忘れるべきではない。

大東亜戦争について東亜の新秩序の着々建設されんとする時、国文学の研究と教育とに従ふのもまたこの大きな使命の実現のために渾身の努力を捧げることを誓ふのである。天皇に絶対随順し奉るみ民としての自覚は国文学の教学の根底となるべきであろう。（久松潜一「国文学の動向と課題」『日本諸学』創刊号昭和一七年三月）

これらは戦後否定され、大幅に古典教材が減少することになる。そのなかにあつて古典文学研究に携わる学者たち、例えば、先に引用したものを書いた同一人物が次のように述べるようになる。

新学制の実施にともなつて国語教育に於てもその対象と方法とについて種々の反省を要請されて居る。それだけ新しく解決すべき幾多の問題がある。六、三、三、四のそれぞれの段階に於て国語の学習はどの程度になされるべきであるか。現代日本語の習得と古典文学の研究とはどのように結びつけられるべきであるか。（中略）私も国語教育と国語国文学の研究に従事するものにとつて今や虚心に考察し、それを体験に即して生かしてゆくことが何より必要である。（『国語国文学教育の方向』「健文社」序文昭和二四年）

言葉の上では反省が必要とされては居るものの、戦前の古典と教育の結び付きを検討し、古典と向き合うことの意味を再考しようとする取組の必要性が明確に意識されていたのだろうか。戦前のあやまちを追及しようとする気持ちがある程度あったのだろうか。この問題と本稿で述べた西鶴作品の教材としての変遷とを考え合わせると、戦後すぐに取り組まれるべきであった古典教育の重要な課題が、未だに殆ど手付かずの状態で残されているという思いを禁じ得ないが、この点についてはまた稿を改めて述べてみたい。

(平成二年十二月十九日受理)

付記 本研究報告第一四号所収の拙稿「『中学国文教科書』における西鶴作品について」は調査が不十分であったため、西鶴作品の掲載状況の報告に大きな誤りがありました。勝手ながら、本稿の記述をもって訂正とさせていただきます。